

No. 7

Un roseau

アンロソ

総合教育科目ガイドブック



旧教養キャンパス中庭にて

人類のネットワークのなかで

理学研究科・理学部 石井 廣 湖

外国語を学ぶということ

大学教育研究センター 大澤 慶 子

学ぶことは人と出逢うこと

文学研究科・文学部 村田 正 博

2006年3月

編集・発行 大阪市立大学大学教育研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL (06)6605-2131

人類のネットワークのなかで



理学研究科・理学部
石井 廣 湖

皆さん入学おめでとう。学部の中かの所属学科もすでに決まって、人生の進む方向がおぼろげながら見えてきたのではないのでしょうか。大学生活をどう送ろうかと、張り切っていることと思います。

皆さんは受験競争を突破するために勉強したこと

人類のネットワーク

高校までは細かいところまで先生が手を差し伸べてくれましたが、皆さんを迎える大学では学生の主体性が尊重され、学生自らが考え学ぶことが求められます。大学とは教育機関であると同時に研究機関でもあります。これは教育が研究の分だけ手薄になるといえるのではなく、大学でなされる教育には研究が深く関わっていることを意味します。今行われ

タイトル “Un roseau (アン ロゾ)”

— 一本の葦 — について

B. Pascal (1623-1662)は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドゥ・
la nature, mais c'est un roseau pensant.
ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

一人は一本の葦に過ぎない。自然界で
もっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える(思考する、思想する)という行為によって、有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

ている研究が今の教育に反映され、生きた内容の教育が行われます。大学で教育し研究する学問とは、人類の築いてきた知識（考え方や技術、言語などを含め）の集積したもので整理され体系化されたものです。学問が人類の築いてきた知識の集積とは大きな感じがするかもしれませんが、人間と他の動物とを比較して見ると、知識の集積とはどんなにすごいことか分かります。たとえば人間が書くことも口伝えることもできなかつたとすれば、何をするにもゼロから始めなければならぬことになります。人が一生かかって築き上げたことも伝達が無ければ、次の世代はまたゼロから始めなければなりません。しかし、人は生まれたときはゼロの状態から出発するものの、成長する過程の中で、過去から現在までに蓄積された膨大な考え方、知識と技術を学び、それを自らの中で再現し自分のものとして生きてゆきます。ここに教育の役割があります。

人間一人一人は生まれてやがて死んでいくのに、

獲得された知識は次の世代にさらに進展した形で受け継がれていきます。ニュートンの発見は現代に生きていますし、モーツァルトが生きているといわれるのもこの意味においてです。我々は世界中の同時代の人々と互いに直接そして間接に様々な形で関係して生きていますが、過去の有名無名の無数の人々ともこのようにつながっているのです。我々一人一人が、この空間と時間を隔てて結びついた人類のネットワークの一員だということを認識することは大切なことです。人類のネットワークの中で作られてきた学問を学ぶ意義も感じてもらえたいでしょうか。

このことを、「原子の存在」がどのようにして人類に共有される知識になってきたか、を例にして説明します。今日では物が原子からできているということとは明白な事実で、そこから新しい様々な科学が生まみ出されています。しかし原子は小さくて目には見えません。物を半分半分と切っていくとどこまでも分割を続けられるのか、それともどこかで最小の単

位にたどり着きそれ以上は分割できないことになるのか、ギリシャ時代から問題になってきました。

二千四百年程昔、デモクリトスは思弁のみにより、物質は原子という目に見えない小さな粒子からできている、原子と原子の間は空虚な空間であるとの原子論を作り上げました。実験なしで考えられたこのアトム説は現代の物質観に近いところがあり驚くばかりですが、中世には異端として禁止され十七世紀に入り復活します。そして今から二百年ほど前、気体反応が実験的に詳しく調べられ、原子の存在に関する科学研究の第一歩が踏み出されました。

それは、水素と酸素が結合して水ができるように、二つの元素が反応して化合物ができるとき、反応する元素の質量の比は常に一定であり（定比例の法則）、化合物が二種類以上できるときはそれらの化合物の中で元素の質量比は整数の比で表されること（倍数比例の法則）の発見です。全体の量を減らし、倍率比が成り立つためには、物質は究極において1個2個と数えられる最小単位の粒子、ア

トム」からできているに違いないと倍数比例の法則を発見したドルトンが推論しました。これが原子の存在を人類が認識した最初ですが、その後見えない原子の存在を仮定することで様々な現象が説明できるようにになりました。

植物学者ブラウンが顕微鏡の下で観測した花粉の粉の不規則な運動はブラウン運動と呼ばれています。一九〇五年アインシュタインはブラウン運動が分子の熱運動によってもたらされていることを理論的に解明しました。その結果、花粉粒子を揺り動かす実体としての原子・分子の存在が明らかになりました。最近では走査トンネル顕微鏡という装置が発明されたので原子を直接見ることもできます。原子の研究のなかで量子力学が誕生し、それは現代の科学・技術の根幹を支える原理になっています。

科学の発展の一例を詳しく述べてきましたが、様々な分野で現代に至るまで無数の人々の努力が受け継がれ知識が集積されてきました。知識は人類の

財産・宝物です。そこからは人類の幸せにつながるいろいろなことが引き出されます。しかし悲しいことに、知識は良くも悪くも利用できます。人類を幸せにするはずの科学が核兵器の開発に使われ、公害を巻き起こす原因にもなってきました。とくにここ数十年、人類の活動のスケールがますます大きく地球規模になり、地球温暖化など人類の活動への地球の応答が無視できないものになってきました。研究を進めることが人類全体のためになることかどうか、視野を広くもって考えて行かねばなりません。

過去からの蓄積の上に現代の発展があるということとは、科学の学習や研究に限られたことではありません。考えて見れば文化をはじめあらゆるものが過去からの継続の上にあり、そこから新たな発展もたらされます。人類の歴史それ自体が、過去の上に現代が築かれた積み重ねそのものです。しばしば語られるように、過去を学ぶことが現代をより良く生きるための指針になります。この意味で教養として

歴史について基礎知識を持たねばなりません。特に歴史の中でもっとも現代に近い部分は高校では学期の関係で手薄になっていたのでないでしょうか。戦争を二度と起こさないためにも、そして世界の人々と理解しあい仲良く暮らして行くためにも、過去に何があつたか歴史を学ぶことが必要です。

大学で

大学の各学部・大学院の各研究科ではそれぞれの研究領域の研究と専門そして教養の教育を行います。専門教育として学ぶ専門的な知識・技術は、職業人として生きていくための基盤となると同時に、それを通じて社会と関わっていくことを可能とします。専門とする分野を基礎からしっかりと勉強し、皆さん自身の中に体系を構築してください。皆さんは研究者である教員から教育を受けることで、研究の面白さや研究が何たるかを知識に加えて感じることができるようでしょう。しかし知識を学んだこと

と、それを自らのものとして新しい問題に適用し解決してゆくことの間には大きな隔たりがあります。学んだ知識に基づいて、一人でよく考えること、それを質問や議論、演習、実験などで教員にぶつけることが本当の力をつけることに導きます。特に、自分で勉強したことをまとめてセミナーや発表会で報告することは頭がフル回転して大変なことになります。

一方、専門知識を山頂にたとえるならば、その裾野にあるのは専門科目を学ぶための基礎学力、そして広く教養と呼ばれるものです。教養は人間がどのようなに生きていったらよいかについての考え方を豊かにするものです。様々な学部の様々な分野の教員の授業を受けることで、教養の裾野を広げることができます。大学の授業を聴いてこれまで知らなかった世界を垣間見て興味を持ったら、それについて本を読み深く考える自らの努力を惜しんではなりません。読書は古今東西の考えを知る泉です。

皆さんの持つ潜在能力を高めるためには、日本語はもとより英語など外国語の修得がとても重要です。それは言語は人類のネットワークにとって不可欠なものだからです。世界を広げるため、知識を学ぶためにも、意見交換するためにも、そして自分の考えを発信するためにも言葉を通して行うからです。

専門科目であれ教養科目であれ、学生が主体的に学ぶには学ぶ動機が必要です。単位取得のためだけでは試験が済んだらそれっきりということになります。しかし、興味をもてないものには自分から進んで取り組むことはなかなかできません。興味を持つためにはある程度の予備知識が必要になります。予備知識を身につけるには興味がないとできません。ここにジレンマがありますが、ふと耳にしたことをきっかけに興味をもつて考えて見ると面白くなり、調べると知識がついてくる、そうすると興味が深まってくる、・・・という興味と知識の互いが互いの原因となるサイクルがうまく機能しますと、面白

くなり、はまっています。

子供の頃からの興味を一生かけて持ち続け夢を実現した人もいますし、様々な分野を遍歴して現在にたどり着いた人もいます。それぞれの人が時代のなかでどう生きたか興味のあるところです。私の場合のきっかけは小学校のとき作った鉱石ラジオです。こんな簡単な回路でラジオが聞こえる、なぜだろう。これは興味を引くのに十分で、高校時代までラジオ作りと技術書を読むのに没頭しました。この頃は工学部へ進んで電気会社に就職することが夢でした。しかしラジオの動作原理を学ぶうちに物理や数学に興味を感じてきて、大学は物理学科に入学することにしました。入学して専門科目を学び、興味を感じた磁性理論の研究室に進むことになり、以来、物質の磁性の研究を今日まで続けています。必ずしも学ぶ動機のまっすぐな連続ではありませんが、興味と勉強（研究）がかみ合っていたと思っています。

自分が何をやりたいのか、なかなか見つからず

様々な方向を模索している人が増えています。入学して何をしたいのか定まらない人は、ほんの少しでも授業で聴いた話や読んだ本の内容に、「なんだろう」、「なぜだろう」と好奇心を持って考えて、興味と学習のサイクルのきっかけとしてください。

おわりに

現代の膨大な知識は、人間のネットワークの中で積み重ねられてきたものです。大学ではこの知識の体系を基礎から学び、それをもとに自分で考え、実際の問題に適用して解決する能力を身につけてください。そしてそれをもとにこんどは皆さん自身が人の役に立つ仕事をして、人間のネットワークに新たなものを付け加えてください。

よく学びよく考えて自分の能力を高め、豊かな大学生生活を送られることを願ってやみません。

外国語を学ぶということ



大学教育研究センター
大澤慶子

はじめに

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

大阪市立大学で勉強することになって、大学の勉強ってどんなのだろう、自分に関心のある分野をちゃんと学べるのだろうか、と期待やほんの少しの不安

などを持っていらっしゃるのではないのでしょうか。

授業で学ぶことだけではなくて、自分で図書館（本学では「学術情報総合センター」という名前）、全国的にも屈指の設備を備えています）で調べたり、書店でぶらぶらと本の背中を見て歩いたり、友達を作って興味のある話題で徹夜の議論をしたり、クラブ活動に励んだり、恋愛をして幸福感を味わったり、失恋して挫折感や喪失感に苦しんだり、人間として学生として、さまざまな「学び」をして成長していく場が大学です。

これまでのように、「大学受験・合格」という目標があって、それを目指して走っていけばよかった時期（既製服を着るのに似ています）と違って、これからの四年間はみなさん一人一人が自分に合わせて作っていく、いわば「カスタムメイド」「オーダーメイド」の時期になります。そのためには、自分がなにを求めているのか、どんなことをしたいのか、よく考えてオーダーを出さないと、ほんとうに満足できる学生生活にはなりません。大学生活はまずこの

オーダーを考えるとところから始まります。

オーダーを出すために

ところで、オーダーを出すために必要なものはなんでしょうか。答えは「言葉」です。言葉がなければ、「自分はこうしたい」という注文を細やかに伝えることができません。それ以前に、自分の考えていることをまとめることもできません。言葉がなければ、考えもないのです。言葉は現実をとらえ、認識し理解する手段でもあるわけです。その例をあげてみましょう。

日本語に「虹は七色」ということばがあります。日本の言語文化の中で育ってきた私たちは、虹を見たとき、七つの色を認識します。この認識は外国では必ずしもそうではない、と聞いていたので、あるときドイツ人の友人に「虹には何色あると思う?」と尋ねてみました。そうすると、彼女はちよつと考

えてから、「さあ、五色かな」と自信なさそうに答えました。

これはどういうことでしょうか。虹は自然現象ですから、ドイツの虹が日本の虹と違ってはいるはずはありません。それなのに、明確に七色を認識できる私たちと「五色くらいかな」とおおまかに認識しているドイツ人との違いはどこから生まれるのでしょうか。それは日本語とドイツ語のものの見方の違いから来ているのです。

私たちは「虹には七色ある」と言葉で知っています。そうすると、七つの色が区別されて見えるのです。「虹は七色」というようなイディオムの表現を持たないドイツでは、漠然と虹を見ているので、七つの色を区別することができずに、おおまかに四色か五色かな、と見るわけです。

右に挙げた例は、日本語のほうが細やかな感覚を持つている場合でしたが、言うまでもなく、いつもドイツ語のほうがおおまかなわけではありません。私はドイツ文学を中心に研究していますので、ドイ

ツの詩や小説を読むことが多いのですが、例えば馬のタイプを表現する単語の多さに辟易することがよくあります。馬の種類や性別、毛色の違いなどで、そのつど異なる名詞が使われるのです。日本語でも「連銭葦毛」のような表現がありますが、小説になんの前置きもなく使われるほど日常的な単語ではないでしょう。一般にその言語が関心をもっている分野について語彙が豊富であるというのは、よく言われることです。ドイツ語で馬の区別をするのにさまざまな表現があるのは、それだけ日常生活の中で馬が重要な意味を持ち、区別される必要があった、ということを意味しています。狩猟を主としてきたゲルマン民族の生活文化の伝統でしょうか。

外国語を学ぶとは

このように、言語が違えば、現実の把握のしかたも変わります。現実の把握のしかたが変わるとい

ことは、その人の世界が変わるということです。外国語を学ぶ醍醐味はここにあります。外国語を学ぶとは「自己を変革すること」でもあるのです。もつともこれは外国語に限ったことではなく、学ぶことはすべて自己変革につながるのですが、外国語の場合には、その言語圏のもつ文化や伝統の世界が明確な私たちで見えていますので、それとのかかわりを深めることで、自分の世界が広く深くなり、日本のことばや文化を客観的な目で眺められるようになるプロセスが実感しやすいと言えるでしょう。この「自己客観化」は人間としての教養の基礎となる能力です。ドイツの文豪ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ(一七四九―一八三三)は、「世界文学」という表現で、個性をもちながら世界に通用する文学を理念に掲げました。その彼が「外国語を知らない者は、自国語についても無知である」と言っています。外国語を学ぶことによって自らの言語を客観的に見る眼を養い、自らの個性を活かしつつ、他者にも理解できる普遍性のある文化を育んでいくよう

に、とのメッセージです。

それではどの外国語を学ぶのか

外国語学習が全人格的な意味を持つということ、理解していただけたでしょうか。ところで、大阪市立大学に入れば、ほとんどの人が英語以外にも一つの必修外国語を履修しなければならぬことになっています。英語さえできればいいのではないのか、なぜあまり使われないその他の外国語（本学では、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語の五つの言語が開講されています）を学習しなければならぬのか、と疑問に思われるかもしれません。

英語が現在国際社会で意思疎通のための言語として圧倒的な強さをもっていることは、否定できない事実です。ビジネスや観光のためなら、英語ができればじゅうぶんでしょう。でも、ビジネスや観光の

ためにだけ外国語を学ぶのでしょうか。「なにかをするのは具体的な目的のため」という考え方をプラグマティズムと言いますが、外国語学習には、このプラグマティズムが働きやすい側面があります。それは言語がいわゆるコミュニケーションの手段として有効だからです。

しかし、言語の存在理由はそれだけではありません。外国の文化や伝統をほんとうに知るためには、その言葉を学ぶ必要があります。また、すでに述べたように、現実認識の手がかり、思考の前提となるものでもあるのです。さらに、外国語を学ぶことは、その外国語の論理でものを考える訓練をすることにつながります。それはものの見方を柔軟に複眼的にしてくれます。脳が活性化するとも言われています。

つい先ごろ、文部科学省が初等中等教育の理念をこれまでの「ゆとり教育」から「言葉の力」に変更するというニュースがありました。言葉はすべての学習の基礎であり、人間を人間たらしめているもの

だという認識にたどりついたのでしょうか。言語は文化の重要な部分を担っています。外国語を学ぶことは、その外国語が背景にもつ歴史や文化、ひいては人間の営み全体を学ぶことであり、自国の文化と絶えず重ね合わせて共通性や差異を意識しながら、相手と自己の間の理解の可能性と困難さを確認しつづけることなのです。そして、理解の困難なところをいかにして小さくできるかを考えつづける作業なのです。

私たちにとって、このような営みは、多くの外国語との間で行われるべきものだと思います。これから大学で学ぼうとする人たちには、ぜひ複数の外国語に親しんで、広い視野と柔軟な思考を身につけていただきたいのです。専門の勉強に必要だからという人も多いでしょう。どういう理由からでも、「やってみようかな」と思ったものを選んでください。選んだ以上は「石の上にも三年」で、根気よくあきらめずに勉強してください。

大学で提供される外国語の数は限られています

が、視野の広い教養人になるためには、複数の外国語を学ぶことが必須条件でしょう。幸いなことに、外国語の学習は二つ目、三つ目となるにつれて容易になると言われています。みなさんはいいて英語をすでに学ばれたでしょうか。新修外国語としてなにか一つ学習すれば、その次に学習する外国語ははるかにやりやすいはずですよ。

「どうしても話したい」人に

最近「発信型の外国語運用能力」ということが言われます。もちろん、外国の人と外国語で意思疎通ができ、人間としての交流ができるのはすばらしいことです。外国語学習の目的が「話すこと」であるという人がいても、少しもおかしくありません。

ところで、発信というからには伝えるべき「なにか」がなければなりません。みなさんには、外国人の友人にぜひ伝えたい「なにか」があるでしょう

か。日本のアニメやコミックが最近アメリカやヨーロッパでも大人気だと伝えられています。私も数年前にミュンヘンのデパートで「わ、ピカチュウだ」と叫んでぬいぐるみに飛びつく金髪の少女を見て、びっくりしたことがあります。あなたの外国人の友人が、日本のアニメやコミックに関心を持っているとして、あなたは十分に説明してあげられるだけの知識をお持ちでしょうか。——そうなのです。まず、自分が感動した経験や、日本語でちゃんと説明できるだけの体系的な知識がなければ、「発信」はありえないのです。この意味において、外国語運用能力は日本語の思考能力でもあるのです。

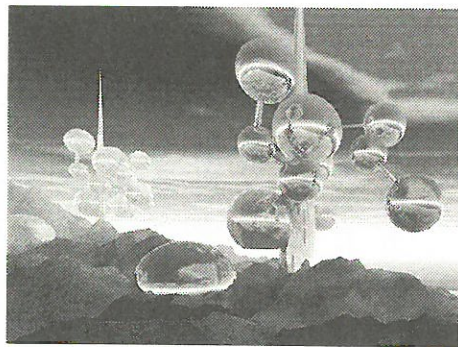
でも、最近では「使える英語」とか「しゃべる能力」とかが大流行です。ちょっと勉強すれば、すぐにネイティブスピーカーと楽しい会話ができるかのような幻想が街なかの広告にあふれています。水を差すつもりはありませんが、そう簡単にはいきません。

外国語の達人と言われる先達の本を読みますと、

「とにかくテキストを音読して暗記せよ」というのが多いですね。どうやら外国語学習に王道はないらしくて、暇さえあれば教科書などのわかりやすい文章を音読したり書いたりして、暗誦しなさい、というところのようです。一説によると、ある外国語を最小限「読み、聴き、書き、話す」ことができるためには、二千時間の学習が必要だそうです。二千時間を一年でクリアしようと思えば、一日に五時間半ほどになります。一日に五時間半勉強しなければ、一年で最小限の意思疎通ができるレヴェルに到達しない、ということなのです。

私個人の経験からは、とにかく「話したい」と思う外国語に触れている時間を多くすることが上達の秘訣で、文法をしつかりマスターしたうえで「読み、聴き、書き、話す」をバランスよく組み合わせるのがいいと思います。とくに「読む」がいちばん基本であることは、だれもが言うとおりです。単語を音声として聴き取れても、意味がわからなければどうにもなりませんからね。

大学で身につけるべきは、りっぱな社会人としての教養なのですから、教養人として恥ずかしくない外国語、書き言葉の外国語を学んでください。そのためにも、外国語の本だけではなく、日本語の本もたくさん読んで、映画や演劇や音楽、美術を鑑賞して感動する豊かなところをはぐくんできて下さい。そのなかでこそ、あなた自身にじっくりと合った「オーダーメイド」の教養が身についてくるでしょう。そうしてはじめて、教養ある外国人と品位のある対話ができるようになるのです。



学ぶことは人と出逢うこと



(当時の写真、はて今では…)

文学研究科・文学部
村田正博

散髪屋さんの椅子の上

幼稚園に上がる直前のこと、私の家から三筋向こうの散髪屋さんに行った。その店には、ヒコさんと呼ばれるお兄さんがおられ、私は、ヒコさんでなければ椅子の上にあがらないという、わがままな子

供であった。お店の人たちもそのことをよく心得ていて、私が行くと、ヒコさんの手が空いていなくても、うまくやりくりして私のわがままを通させてくれた。ヒコさんは、杉良太郎に似た、やさしいお兄さんで、散髪の間、兄弟のない私にとって(その一年後、弟ができるが)、存分に甘えることができるのが快かった。

「ぼんも四月から幼稚園やな」

「うん」

「ぼんも」と言われたことで、自分がヒコさんと同等の扱いを受けたという気がして、背筋を伸ばした。ヒコさんにしてみれば、いつまでも幼く甘えん坊の私を、ちよつと上級の子供たちの仲間入りをさせて「ぼんも」と言われたのだから、私は、その時、そう感じて、嬉しかった。

「どこの幼稚園に行くのん」

「マヤ幼稚園」

「ほうか。マヤ幼稚園か。小学校は、この先の乾小学校。ぼん、知ってるか」

「うん、知ってる」

「中学校は、二条城の裏の中京中学やな」

「ぼく、知らん」

「ほうか、知らんか。けど、高校は、知ってるやろ、ぼんの家に向かいにある堀川高校」。高校を出ると、大学やで。大学はな、近いところでも、遠いところでも、どこへ行ってもええのんや。それからな、大学を出ると、大学院というのがあってな、なんぼでも勉強できるようになったアるンやで。ぼんは、大学院へ行くか」

「うん、行けたら、行ってみたい氣イする」

大学から先は、私の聞いたことのない世界であった。だが、ヒコさんが言うのだから、ぼくもきつとそこへ行こう、その日の椅子の上で、私は、そう決意した。

大学というところ

私が大学を受験したのは、大学紛争が熾烈を極めた一九六九年の春のことである。東京大学・東京教育大学などで入学試験を行なえず、そちらの受験生がこちらへ受験しに来たものだから、合格最低点が満点の九割という、すごいことになってしまつて、私は、第一志望の大学(三月上旬に入試のある、当時のいわゆる一期校)をすべつて、すべり止めのはずの大学(三月下旬入試、いわゆる二期校)に入学することにした。京都教育大学教育学部Ⅱ類(中学・高校教員養成課程) 国語国文学科である。

同じ時に入学した学生たちの、その多くが第一志望をかなえたのではなかったからであろう、講義が始まつても出て来ない人、講義には出て来ても、来年の春と一緒に受験しなれないかと幾度も誘う人など、今ここにあることに満足できない人が、ちらほら、いた。同じ学科の、同じ回生が集まる機会があると、「夜明けのコーヒー、二人で飲もうと、あの人が言った」という「恋の季節」を皆で歌

ったり、ポコちゃんとかペコちゃんとか愛称で呼び合ったり、思い描いていた大学の学生生活というものとはずいぶん違うなど、私も違和感を持たざるを得ないところも、たしかに、あった。

私は、手描き友仙の職人のせがれである。ヒコさんは、「高校は堀川高校」と言うたけれど、父は、工芸系の高校に進学させたいと思っていた。父の知り合いの染屋のおじさんが「早う型にはめるより、広う勉強させておやりやす」と言ってくれて、堀川高校の普通科に進んだのだった。職人になるのに学問はいらない、その上さらに大学に行くなどもつてのほかかと信じて疑わない父に、友仙の模様にある三十六歌仙や初音（源氏物語）の図柄は国文学を知らないより知っている方がよい仕事ができるはずと思ひこませて、何とか漕ぎ着けた大学入学なのであり、私には、父の気の変わらぬうちに、ここで勉強に打ち込むしかないと思われた。

たとえば、フランス語や倫理学で学んだこと

大学でまず受講した一般教養科目（現今言うところの総合教育科目）には、どうしようもなく眠い科目も、たしかに、あった。深呼吸してみても、頬をつねってみても、靴を脱いでみても、眠い。老教授の、抑揚のない、緩慢な講義が延々と続く。ある日、教授の口が動くとおりにすべて筆記してみたところ、ちよūdよい速度で話されているのがわかり、眠くなくなった。が、講義の初めに列挙された参考文献の中の、その教授の著書のそこそこを抜き読みされているに過ぎないことにも、そのうちに気づいてしまった。こういう時に、学生は失望するのだと、私は銘記したものである。

しかし、静かに話される講義にも、はつとさせられるものがあつた。

amoureux というフランス語の形容詞が出て来た時、amour（愛）に満ちて輝いているといった意味の言葉で、日本語には、それにびつたり相当する言葉が見つかりませんねー、担当の先生は、そう言われ

た。異国の言葉のこれには日本語のこれが当たる

ー、日本語でこう言う場合には異国の表現ではこう言うー、そんなふうにはポキヤブラリをふやしてゆけばよいと思ひこんでいた私には、その説明は、驚くべきものであつた。

生まれも育ちも違う言語の間に、こちらにはそれに相当する言葉がないというのは、あつてしかるべきことである。そこをいかに繋いで、二つの言語の間に理解を実現するかー、それぞれの言語を育んできた人びとの暮らしやものの考えかたなどをそっくり理解することではいか、そこを繋ぐことはできないだろう。繰り返しによって習熟する、幼時の言語習得ではない、成人に達しようとする時期の、大学における外国語教育の要諦を、私は、その先生の説明によって気づかせてもらったと思う。

一般教養の倫理学も、私には、印象深い科目である。担当の先生は、フイヒテの哲学がご専門らしかったが、講義では、日本の思索者のことを多く教わった。

生まれ生まれてきたものもひとりなり、死するも独ひとなり。され

ば、人と共に住するも独ひとなり。そひ生来たもとも一緒に生きる人はつべき人なき故なり。（『一遍上人語録』巻下）

人間の本質的孤独を言う、一遍上人のことはである。みーんな一緒だから案ずることはないのだよと教わってきたのに、この確信に満ちたことばは、ほんとうはそうなのかもしれないという、言わばこわいもの見たさで私を『一遍上人語録』へと誘ひこんだ。

生あれば死あり、死は生の一つのかたち、その最も本質的なかたちだと措定することで、生も死も、それにまつわるすべてのものもその本来のかたちをあらわし、自然で自在になると説く、その一節に、

華間の事は華にとへ、紫雲間の事は紫雲にとへ。一遍はしらず。（同、巻下）

あるいは、

他力不思議の名号は、自受用の智（弥陀の名号を唱えることで、唱える者が弥陀となる、だから、弥陀が弥陀の念力を發揮することに等しくなるわけで、かならず成仏できるといふ悟り）なり。故に、仏の自説ともいひ、亦また随自意ともいふなり。自受用といふは、水が水をのみ、火が火を焼くがごとく、松は松、竹は竹、其の体おのれなりに生死なきをいふなり。（同、巻下）

ということばが見え、これらの一遍のことばは、芭蕉による、次のことばを想起させるではないか。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。

（『三冊子』、あかさうし）

漂泊の芭蕉は、遊行のひじり一遍の語録を読んだのだと私は思う。『一遍上人語録』に誘いこまれたという縁で、一般教養の倫理学と私とが繋がり、その

『語録』を通して、私と芭蕉とが繋がる。それは、後に私の専門とすることになる研究領域にすでに踏み込む問題でもある。

学ぶことの本質

倫理学の講義で、もう一つ、忘れることができないのは、親鸞のことばを紹介されたことである。

親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけまゐらすべしと、師法然聖人よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の格別子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生むまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、理じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にまされかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、ちつともさらに後悔すべからずさふらふ。（『歎異抄』）

学ぶとは、師匠を弟子が信じることにその本質なので、絶対孤独の人という存在がそれぞれに関わりを持ちつつ生きて死ぬ、その関わりの筋みちを思索する学問で倫理学があるとすれば、その美しい典型がここにありませんね、このことばについて、そう先生は説かれた。

学ぶということについて、現実には、それとは逆の場合が少なくないことを、その後、私も思い知ることになる。夏目漱石『三四郎』に登場する広田先生のモデルだという、岩元禎（一高教授）とその弟子たちを描く、高橋英夫『偉大なる暗闇』（一九八四年、新潮社。現在、講談社文芸文庫）の一節を借りて言うならば、

師との関係がうまくいかなかったり、期待にこたえられなかったりした場合、弟子はしだいに師から離れてゆく。こういうとき、弟子の心の中に逃亡者の意識、不肖の弟子という自虐、罪責感などが発生する。…人間関係である以上、師

の心にもそういう去った弟子に対する感情の翳りは生じたかもしれないが、師というのは本質的に弟子から去られる存在なのである。逆説的にいえば、弟子が遠ざかってゆく寂しさを味わわなかったら師ではありえない。（第四章）

しかし、そうであつても、親鸞のことばは、重い。教わる立場にある時、教える立場にある時、私は、やはりその美しい典型を念願せずにはいられない。このことばを教わった倫理学の先生に、きちんと教わったことの、それが私なりの証なのだと思つて。

「よきひと」を思い出す

私にとつて、学ぶことは、ヒコさんからはじめて、「よきひと」に出逢うことであつた。そのことを自覚する時、幼時の無意識のうちに父母から多くのことを学んできたことにも気づかれるし、もう一

●●●●● 筆者略歴 ●●●●●

石井 廣湖(いしい ひろうみ)

1939年生まれ
現在、理学研究科・理学部特任教授
専攻分野／物性理論 物質の磁性と超低温物性
担当講義／基礎物質科学、基礎物理学 I、II、実験で知る自然環境と人間(分担)、マイクロとマクロの世界(分担)

大澤 慶子(おおさわ けいこ)

1945年生まれ
現在、大阪市立大学大学教育研究センター教授
専攻分野／比較文学 大学評価システム
担当講義／ドイツ語入門、ドイツ語初級、1回生セミナー

村田 正博(むらた まさひろ)

1951年生まれ
現在、文学研究科・文学部教授
専攻分野／国文学
担当講義／日本の詩歌、国語国文学演習、古典講読

編集後記

新入生みなさん、入学おめでとうございます。この冊子「アン ロソ」は毎年3月に発行してみなさんのお手元に届けていますが、はや7号になりました。7年間で大学はずいぶん変わってきたように思います。とりわけ今年は、大阪市立大学にとって「法人化元年」です。みなさんは記念すべき年に入学されたわけです。

1年生に入学されるみなさんはほとんどが20歳前でしょう。平均寿命から言えば、あと60年前後の時間があるわけですね。編集子が望むのは、どうか専門に小さくまとまらないでいただきたいということです。60年の変化に対応するには深く広い教養が不可欠です。即戦力の知識は早晚古くなります。世の中が変化してもその変化に対応していける能力は、一見回り道に思えても、基礎をしっかりと学習することでしか身につけません。その基礎を作るのが、総合教育科目や外国語です。今回の三人の先生方のエッセイは、大学での学びと心豊かに充実した人生の道しるべとなることでしょう。総合教育科目を、外国語を、またそのほかの科目を、真摯に学んでください。

大学教育研究センター ホームページ
<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

つ、幼稚園に上がる前の私に大学や大学院のことで話してくれたヒコさんは、学問をしたかったのだろうと付度もされる(ヒコさんが克彦さんであったのか、彦一さんであったのか、その店も今は無く、確かめるすべもないが)。その思いを私の思いにしてきた―、そういうことなのである。

ここには、大学の一般教養のことを中心に記したが、これまで学んだすべての場所に、「よきひと」の存在があった。学問の中心を『萬葉集』に定めたことについては、『AERA Mook 萬葉集がわかる。』(一九九八年二月、朝日新聞社)にも、もう一つを中心として漢詩文に取り組むようになったことについては、『新編 日本古典文学全集 萬葉集④』の月報(一九九六年七月、小学館)に、それぞれ記したので、手に取られる機会があれば、読んでほしい。二〇〇三年以来、妻が「冬のソナタ」にはまり、私が正岡子規にはまった、その経緯については、いまだ記す機縁に恵まれない。

